

## イザヤ書64-66章「神の民の祝福と滅び」

### 1A 残された者の祈り 64

1B 火の中に降りてこられる方 1-4

2B 不義の告白 5-12

### 2A 新しい名 65

1B 反逆者に手を伸ばす方 1-7

2B ヤコブの中から選ばれた者 8-16

3B エルサレムの再創造 17-25

### 3A 新しいエルサレム 66

1B 御言葉に心碎かれる者 1-5

2B 生まれるシオン 6-14

3B 火の中から戻られる主 15-24

## 本文

### 1A 残された者の祈り 64

64章は、63章の続きですが、前回のおさらいをしたいと思います。主のしもべが、主の恵みの年を告げ、それから神の復讐の日を告げられ、それからシオンに慰めを与えられます。その復讐について、63章で主が、エドムにいる国々の軍隊に対して戦っている姿を見ます。終わりの日に、そこに逃れていく残りのイスラエルの民を、反キリストの率いる世界の軍隊が彼らを滅ぼそうとしているところへ、主が天から戻って来られているからです。そして、これらの全ての幻を見て、残りの民が祈りを捧げているのが63章8節以降でした。主が古に、エジプトから連れ出されたけれども、その同じ主が私たちの神であり、私たちの父です。あなたが私たちを贖ってくださいと祈っています。

### 1B 火の中に降りてこられる方 1-4

64:1 ああ、あなたが天を裂いて降りて来られると、山々は御前で揺れ動くでしょう。64:2 火が柴に燃えつき、火が水を沸き立たせるように、あなたの御名はあなたの敵に知られ、国々は御前で震えるでしょう。64:3 私たちが予想もしなかった恐ろしい事をあなたが行なわれるとき、あなたが降りて来られると、山々は御前で揺れ動くでしょう。64:4 神を待ち望む者のために、このようにしてください。神は、あなた以外にとこしえから聞いたこともなく、耳にしたこともなく、目を見たこともありません。

主が天から来られて、国々に対して力をもって戦われる場面です。それは、あたかもシナイ山に主が天から降りて来られた時と同じように、火をもって来られ、地震をもって来られ、神の聖さを現わしておられます。そして、イスラエルの残された民は、このようにして救ってくださり、戦ってくださ

る神は、これまで神ご自身から聞いたこと以外にはなかったと言っています。すばらしいですね、私たちが聖書にしか書かれていない神の働きがあり、そのことを信じて主を待ち望んでいます。

## 2B 不義の告白 5-12

64:5 あなたは迎えてくださいます。喜んで正義を行なう者、あなたの道を歩み、あなたを忘れない者を。ああ、あなたは怒られました。私たちは昔から罪を犯し続けています。それでも私たちは救われるでしょうか。64:6 私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。私たちはみな、木の葉のように枯れ、私たちの咎は風のように私たちを吹き上げます。64:7 しかし、あなたの御名を呼ぶ者もなく、奮い立って、あなたにすぎる者もいません。あなたは私たちから御顔を隠し、私たちの咎のゆえに、私たちを弱められました。

残りの民が罪の告白をしています。イスラエルの民全体のために、代わって罪の告白をしています。エドムのボツラにいる残された者たちは神に立ち帰ろうとしていますが、他の多くのイスラエル人は、主に対して意にも介していないようです。そこで、その人たちも含めて代表して祈っているとされます。

二つのことを主に話しています。一つは、自分たちが今、正しいことをしていると言っても、神の前では不潔な着物、直訳では、月の物によって汚された布のことです。レビ記には、これを不浄の期間と呼んで、血が出ている間は汚されているとみなされていますが、神に受け入れられないということです。私たちがいくら正しいことをしていたとしても、それが神の前ではそれだけ汚れたものなのだ、ということです。それから、祈ることさえしていないと言っています。主の御名を呼ぶ者がいない、と言っています。私たちの問題は、祈らないことです。自分ができていないということが問題なのではなく、できていない自分をそのまま主に持っていけばよいのですが、その思い煩いを神の持つて行っていない問題があります。「ヤコブ 4:8 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。」

64:8 しかし、主よ。今、あなたは私たちの父です。私たちは粘土で、あなたは私たちの陶器師です。私たちはみな、あなたの手で造られたものです。

主に嘆願をしています。一つは、主なる神は私たちにとって父であること。そしてもう一つは、陶器師であることです。父は子を捨てることはできません。陶器師は、自分の持つてきた粘土を練ることはあっても、捨てることはありません。形を変えて、作品にすべくあきらめません。神はその愛のゆえに、また造り主であるがゆえに、私たちから離れることはできないということです。

64:9 主よ。どうかひどく怒らないでください。いつまでも、咎を覚えなさい。どうか今、私たちがみな、あなたの民であることに目を留めてください。64:10 あなたの聖なる町々は荒野となっています。シオンは荒野となり、エルサレムは荒れ果てています。64:11 私たちの先祖があなた

をほめたたえた私たちの聖なる美しい宮は、火で焼かれ、私たちの宝とした物すべてが荒廃しました。64:12 主よ。これでも、あなたはじつところえ、黙って、私たちをこんなにも悩まされるのですか。

主がシオンを慰める、と約束してくださっていますが、今、エルサレムは敵によって攻め取られています。ゼカリヤ 14 章 2 節に、主が戻って来られる直前にエルサレムが攻められている姿が書かれています。「わたしは、すべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。町は取られ、家々は略奪され、婦女は犯される。町の半分は捕囚となって出て行く。しかし、残りの民は町から断ち滅ぼされない。」ですから今、ユダヤ人はいろいろなところにいます。イエス様の指示に従って、反キリストが聖なる所に立つのを見た者たちは、こちらボツラのほうにきています。けれども、エルサレムに残された者たちは、国々に攻められました。けれども、エルサレムの半分は滅ぼされておらず、そこに残っている住民もいます。

## **2A 新しい名 65**

そして 65 章から主が祈りに答えてくださいます。66 章の最後まで語っておられますが、これが意外なものでした。

### **1B 反逆者に手を伸ばす方 1-7**

65:1 わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ、わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた。わたしは、わたしの名を呼び求めなかった国民に向かって、「わたしはここだ、わたしはここだ。」と言った。

今、このように残りの民が主に呼び求めていましたが、主は、ご自身が、呼び求めてもいなかった者たちに見付けられたということです。これは異邦人のことです。イスラエルの神を、イスラエル人ではない者たちが見だし、この方の名を呼んでいるということです。これがまさに、私たち異邦人がキリスト者になっていることを預言しているものであります。これが新約聖書の大きな流れになっています。ユダヤ人だけでなく、異邦人にも神がキリストにあって救いの働きをされたということです。「ヨハネ 1:11 この方(つまりキリスト)はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」とあります。そしてイエス様はユダヤ人指導者たちに、ぶどう園の例えを話され、神の預言者を殺し、神の独り子さえ殺すために、「神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。(マタイ 21:43)」と言われました。そして事実、世界中の異邦人の間で、イスラエルのメシヤであるイエスの名があがめられています。

65:2 わたしは、反逆の民、自分の思いに従って良くない道を歩む者たちに、一日中、わたしの手を差し伸べた。65:3 この民は、いつもわたしに逆らってわたしの怒りを引き起こし、園の中でいけにえをささげ、れんがの上で香をたき、65:4 墓地にすわり、見張り小屋に宿り、豚の肉を食べ、汚れた肉の吸い物を器に入れ、65:5 「そこに立っておれ。私に近寄るな。私はあなたより聖なるも

のになっている。」と言う。「これらは、わたしの怒りの煙、一日中燃え続ける火である。

ここが大事です、主は異邦人の間で働かされているからといって、頑なにしているユダヤ人を見捨てたのではありません。一日中、手を差し伸べたと言われます。ユダヤ民族についての神の取り計らいは、その後もキリストが来られてからはなくなった。今は教会のみを通して神は働かれる、というのが、キリスト教会の神学になっていました。これを、「置換神学」と言います。教会がイスラエルに置き換わったという意味です。けれども今に至るまで主は、福音を受け入れていない者たちに手を伸ばしておられるのだということです。もちろん、これは異邦人の不信者に対する主の態度でもあります。主が見捨てているのではなく、彼らが拒んでいるのです。

そして、そのイスラエル人たちでしたが、忌まわしい異教の慣わしを行なっているようです。全て、神が汚れていると定めたものであり、死人に触れていること、豚肉を食べていること、これらは汚れているとモーセの律法の中に定められています。それでもって、その儀式を行なっているのは自分は他の人たちより聖い状態になっているという、いわゆるオカルトをやっているのです。主は、罪に対して大丈夫だよとは言いません。主の愛は、罪に対して非常に悲しむ、怒りを燃やす情熱があります。

65:6 見よ。これは、わたしの前に書かれている。わたしは黙っていない。必ず報復する。わたしは彼らのふところに報復する。・・65:7 山の上で香をたき、丘の上でわたしをそしたあなたがたの咎と、あなたがたの先祖の咎とをともどもに。わたしは、彼らの先のしわざを量って、彼らのふところに、報復する。」と主は仰せられる。

イスラエル人だからといって、救いが保障されているわけではありません。これらの忌まわしい行いを悔い改めない者には、主は報われます。

## 2B ヤコブの中から選ばれた者 8-16

65:8 主はこう仰せられる。「ぶどうのふさの中に甘い汁があるのを見れば、『それをそこなうな。その中に祝福があるから。』と言うように、わたしも、わたしのしもべたちのために、その全部は滅ぼさない。

主が、決してご自分の民を見捨てない思いがここにあります。「ぶどうのふさの中に甘い汁」に例えておられます。イスラエルが悪事を行なっているとしても、その中に神に立ち帰っている残された者たちがいるから、損ねてはいけないと言われているのです。かつて、主がアブラハムに、ソドムに十人の正しい人がいるならば、町全体を赦そうと言われたのと同じ思いです。

65:9 わたしは、ヤコブから子孫を、ユダからわたしの山々を所有する者を生まれさせよう。わたしの選んだ者がこれを所有し、わたしのしもべたちがそこに住む。65:10 わたしを求めたわたしの民

にとって、シャロンは羊の群れの牧場、アコルの谷は牛の群れの伏す所となる。

主は地上に戻って来られる時に、イスラエルの山々を回復させます。シャロンとは、今のテルアビブからカルメル山の間にある、地中海沿岸地域であり、アコルはその反対で、ヨルダン渓谷にあり、エリコの西にあります。つまり、低地と低地にある山地、サマリヤやユダの山地全域を豊かに、そこを所有させると言っているのです。

65:11 しかし、あなたがた、主を捨てる者、わたしの聖なる山を忘れる者、ガドのために食卓を整える者、メニのために、混ぜ合わせた酒を盛る者たちよ。65:12 わたしはあなた方を剣に渡す。それであなたがたはみな、虐殺されて倒れる。わたしが呼んでも答えず、わたしが語りかけても聞かず、わたしの目の前に悪を行ない、わたしの喜ばない事を選んだからだ。」

「聖なる山」はシオンのことですが、「ガド」とは、新共同訳聖書や口語訳の聖書には意味が訳さなれていて、「禍福の神」と訳されています。いわゆる福の神のような、異教の神です。そして、「ガド」は運命の神です。彼らは神の国に入ることができず、滅ぼされます。聖書には、終わりの日に、ユダヤ人は救われるけれども、反逆者を選び分けた後で入らせることが教えられています(エゼキエル 20:38)。

65:13 それゆえ、神である主はこう仰せられる。「見よ。わたしのしもべたちは食べる。しかし、あなたがたは飢える。見よ。わたしのしもべたちは飲む。しかし、あなたがたは渇く。見よ。わたしのしもべたちは喜ぶ。しかし、あなたがたは恥を見る。65:14 見よ。わたしのしもべたちは心の楽しみによって喜び歌う。しかし、あなたがたは心の痛みによって叫び、たましいの傷によって泣きわめく。65:15 あなたがたは自分の名を、わたしの選んだ者たちののろいとして残す。それで神である主は、あなたがたを殺される。ご自分のしもべたちを、ほかの名で呼ばれるようにされる。

主は、ここまではっきりと、ご自分のしもべとそうでない者たちを選び分けておられます。これはちょうど、マタイ 25 章 31 節以降で、羊と山羊を選び分けるように国々を右に、左に選り分けたイエス様のような姿です。右に分けられた者たちは、永遠の御国に入れられますが、左の者たちは永遠の地獄に投げ込まれます。同じようにして、大患難を生き延びた者たちですが、もし主を知らなければそれでも退けられてしまうのです。

ここで主は、「わたしのしもべ」と呼んで、そして「あなたがた」と分けておられます。残りの民が先に「私たちはみな、あなたの民」と言っていたので(64:9)、それに答えておられるのでしょう。主は、飽くまでもご自身に立ち帰った者たちのみを、つまり、ご自分のしもべになった者たちだけを救われるのであって、肉においてイスラエル人であってもそうでなければ、滅びるのだと言われています。そして、「ご自分のしもべたちを、ほかの名で呼ばれるようにされる。」と言われています。つまり、新しい変化、新しい変革が与えられて、それで初めて神の御国に入れます。主がニコデモに、

「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ 3:3)」と言われた通りです。

65:16 この世にあつて祝福される者は、まことの神によって祝福され、この世にあつて誓う者は、まことの神によって誓う。先の苦難は忘れられ、わたしの目から隠されるからだ。

祝福はまことの神からのものであり、まことの神によって誓ったもの、あるいは信仰告白をしたものが、事実、御国に入ることができるということです。そして、そうしたものは苦難を受けても、それは忘れ去られる慰めを受けます。

### 3B エルサレムの再創造 17-25

65:17 見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。先の事は思い出されず、心に上ることもない。65:18 だから、わたしの創造するものを、いついつまでも楽しみ喜べ。見よ。わたしはエルサレムを創造して喜びとし、その民を楽しみとする。65:19 わたしはエルサレムを喜び、わたしの民を楽しむ。そこにはもう、泣き声も叫び声も聞かれない。

彼らを待っていたものは、新しい天と新しい地です。この「創造」のヘブル語は、無から有の創造を意味する言葉です。創世記1章で、神が天と地を創造された時に使われた言葉です。神が、天と地を初めにお造りになられたように、まったく新しい秩序を再創造されます。そしてペテロはこの秩序の変化を次のように説明しています。「そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。(2ペテロ 3:12-13)」すべての物質、原子に至るまですべて溶け去り、まったく新しい天と地を造られ、新しいエルサレムが与えられます。

だから当然、先の事は思い出されることなく、心に上ることがありません。特に、罪によってもたらされる悲しみはすべてなくなります。黙示録 21 章4節、「彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

65:20 そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命の満ちない老人もない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる。65:21 彼らは家を建てて住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる。65:22 彼らが建てて他人が住むことはなく、彼らが植えて他人が食べることはない。わたしの民の寿命は、木の寿命に等しく、わたしの選んだ者は、自分の手で作った物を存分に用いることができるからだ。65:23 彼らはむだに労することもなく、子を産んで、突然その子が死ぬこともない。彼らは主に祝福された者のすえであり、その子孫たちは彼らとともにいるからだ。

ここからイザヤの預言は、千年王国の幻になります。黙示録にはこのことがはっきりと区別されていて、20章に、悪魔が底知れぬ所で鎖に縛られ、キリストにある者が主と千年間、この地を統べ治めることが約束されています。そして千年の終わりに、悪魔が解き放たれ、悪魔につくものがエルサレムを取り囲むけれども、主が火によって彼らを焼き尽くします。その後、悪魔が火と硫黄の燃える池に投げ込まれます。そして白い大きな裁きの御座が現われ、陰府にいた者たちが復活し、神の裁きを受けた後にゲヘナに投げ込まれます。それから新しい天と新しい地があるのです。ですから使徒ヨハネは、預言者イザヤが区別せずに見ていたこの二つの姿を、主によってはっきりと、順番を追って示されたわけです。こ

千年王国では、死は存在します。確かに寿命は延びますが、それでも死ぬことがここには示唆されています。新天新地は違います、全ての人が永遠に生きるのですが、千年王国は、永遠の命が必ずしも保障されていません。しかし、非常に長い寿命が与えられており、これは私の想像ですが、千年間生き延びるぐらいの寿命とその環境が与えられるものと考えられます。では彼らはいったい誰でしょうか？ 私たちも神の国で死ぬのでしょうか？ いいえ、主にあつて復活した人は新しい体、朽ちない体を身にまとっています。教会も、大患難の時に殉教した人々も、死ぬことはありません。そうではなく、大患難時代を生き残った国々の民、そして羊と山羊の選り分けで羊になった人々は、この肉体のままで千年王国の中に入ります。彼らは同じように子を産みます。その子も肉体を持っているので、死ぬことがあるのです。環境ははるかに良くなっているので長寿ですが、永遠に生きることはありません。

65:24 彼らが呼ばないうちに、わたしは答え、彼らがまだ語っているうちに、わたしは聞く。65:25 狼と子羊は共に草をはみ、獅子は牛のように、わらを食べ、蛇は、ちりをその食べ物とし、わたしの聖なる山のどこにおいても、そこなわれることなく、滅ぼされることもない。」と主は仰せられる。

地上における神の御国においては、神との語らい、その祈りが全く妨げられることなく行なわれます。それから、動物に弱肉強食がなくなります。すなわち、神との間に平和があり、人と人はもろんのこと、動物の間にも平和がある、平和が満ちたところです。

### **3A 新しいエルサレム 66**

#### **1B 御言葉に心碎かれる者 1-5**

66:1 主はこう仰せられる。「天はわたしの王座、地はわたしの足台。わたしのために、あなたがたの建てる家は、いったいどこにあるのか。わたしのいこいの場は、いったいどこにあるのか。66:2 これらすべては、わたしの手が造ったもの、これらすべてはわたしのものだ。…主の御告げ。…わたしが目を留める者は、へりくだって心碎かれ、わたしのことばにおののく者だ。

主による、ユダヤ人への最後のチャレンジ、問いかけです。彼らは断食を行なったときは、主は、正しい行ないをすることこそがわたしが喜ぶ断食ではないか、と言われました。ここでは神殿です。

いけにえをささげても、その神殿が一体何を表していたかを彼らは忘れていました。

神殿を初めて建てたとき、その建てた本人であるソロモンは、このことを分かっていました。神殿を奉獻する時の祈りで、彼はこう言いました。「それにしても、神ははたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして、私の建てたこの宮など、なおさらのことです。(1列王 8:27)」けれどもユダヤ教において、神殿そのものを大事とする信仰に変わりました。そこに近づき、その中に入ることもそのものが大事になりました。ステパノが、サンヘドリンにおいて弁明した時にこのイザヤ書を引用しています。そのため彼は、聖なる所を壊し、モーセの律法を変えようとしていると責められて、ついに石打ちで死んでしまいます(使徒 7章参照)。患難時代にも神殿が立てられますが、黙示録 11 章によるとそこに二人の証人が立って、預言を行ない、火が出て、反対する者たちが害を受けます。

大事なものは、主の御言葉なのです。そして、心と魂が砕かれる形で御言葉を聞くことです。これが本質であり、その心に神が本当の意味で住んでくださいます。

66:3 牛をほふる者は、人を打ち殺す者。羊をいけにえにする者は、犬をくびり殺す者。穀物のささげ物をささげる者は、豚の血をささげる者。乳香をささげる者は、偶像をほめたたえる者。実に彼らは自分かってな道を選び、その心は忌むべき物を喜ぶ。66:4 わたしも、彼らを虐待することを選び、彼らに恐怖をもたらす。わたしが呼んでもだれも答えず、わたしが語りかけても聞かず、わたしの目の前に悪を行ない、わたしの喜ばない事を彼らを選んだからだ。」

恐ろしいことですが、神への礼拝が偶像礼拝と変わらなくなっている姿を神は描きだしておられます。牛をほふり、羊をいけにえとして捧げることは、神聖な行為のはずです。人が犯した罪というのは、これほど重大なことであり、神はその罪を赦すために、高価な犠牲を払うまでして赦されたことを示すものです。ところが、同じように屠る行為でも、その行為自体は同じことをしているのかもしれませんが、人を打ち殺すこと、犬をくびり殺すこと、豚の血を捧げること、これらは人にしても動物にしても、命を最も軽視した、虐待行為であります。

外見は、神への礼拝をしている行為であっても、その正反対のことを実はしていることがあり得る、ということでもあります。今のイスラム過激派の行なっていることを見ればよく分かると思います。あの礼拝行為が、そのまま虐待行為につながっています。しかしキリスト教の中においても、主の語られることを聞いていなければ、その礼拝行為をしていながら、神を礼拝しているとは到底思えない反対のことをし得るわけです。そのあがめている方は、もはや神ではなく、偶像なのだということを知る必要があるでしょう。

66:5 主のことばにおののく者たちよ。主のことばを聞け。「あなたがたを憎み、わたしの名のためにあなたがたを押しつける、あなたがたの同胞は言った。『主に栄光を現わさせよ。そうすれば、



あなたがたの楽しみを見てやろう。』しかし、彼らは恥を見る。」

主の前に出て、その言葉におののき、生きている者は、儀式だけの礼拝をしている者たちから迫害や嘲笑を受けるということです。パウロがそうでした。彼はこの二つをどちらもやりました。熱心なパリサイ派であった時、ステパノの説教を聞いて、彼への迫害に同意しました。ステパノの説教の内容がまさに、神を礼拝している神殿により頼み、神の言葉を聞いていないという内容のものでした。彼はステパノを殺害し、他のキリスト者も殺害し、捕縛し、まさにテロリストでありました。けれども、イエス様が現れてくださり、御言葉におののく者と変わりました。それから、ユダヤ人に激しく憎まれ、命を狙われ、追われる身となりました。

私たちはいつも、挑戦を受けます。このように礼拝に出ていますが、ここには大きな責任が伴うということです。もし主の御言葉に応答しないで、それを怠って礼拝を形式的に來ているのであれば、御言葉に応答して聖霊に導かれている兄弟や姉妹を身下したり、反対したり、迫害したりすることになりかねないということです。

## 2B 生まれるシオン 6-14

そして次に、主が用意しておられた、シオンの慰めを一瞬にして行なわれることを話してくださいませ。

66:6 聞け。町からの騒ぎ、宮からの声、敵に報復しておられる主の御声を。66:7 彼女は産みの苦しみをする前に産み、陣痛の起こる前に男の子を産み落とした。66:8 だれが、このような事を聞き、だれが、これらの事を見たか。地は一日の陣痛で産み出されようか。国は一瞬にして生まれようか。ところがシオンは、陣痛を起こすと同時に子らを産んだのだ。66:9 「わたしが産み出させるようにしながら、産ませないだろうか。」と主は仰せられる。「わたしは産ませる者なのに、胎を閉ざすだろうか。」とあなたの神は仰せられる。

主が、敵に報復して、それからエルサレムに立ちます。ゼカリヤ書 14 章には、主がオリーブ山に立つことが預言されています。そこでオリーブ山が南北に分かれて、エルサレムの周りが低くなり、エルサレムが高い山となる、その地殻変動が起こることが預言されています。つまり、徐々にシオンが慰めを受けるのではなく、主が戻って来られて瞬時に、このことがなされるということです。それで、「陣痛が起こってすぐに子を産む」という、普通ではあり得ないことに例えています。

そして、「わたしが産み出させるようにしながら、産ませないだろうか。」とされています。つまり、産みの苦しみをしているのなら、必ず出産の時があるということです。イスラエルが産みの苦しみをするのなら、必ずその回復があるということです。キリスト者も同じです。「ローマ 8:22-23 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にして

いただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」

66:10 エルサレムとともに喜べ。すべてこれを愛する者よ。これとともに楽しめ。すべてこのために悲しむ者よ。これとともに喜び喜べ。66:11 あなたは、彼女の慰めの乳房から乳を飲んで飽き足り、その豊かな乳房から吸って喜んだからだ。66:12 主はこう仰せられる。「見よ。わたしは川のように繁栄を彼女に与え、あふれる流れのように国々の富を与える。あなたがたは乳を飲み、わきに抱かれ、ひざの上でかわいがられる。66:13 母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰め、エルサレムであなたがたは慰められる。66:14 あなたがたはこれを見て、心喜び、あなたがたの骨は若草のように生き返る。主の御手は、そのしもべたちに知られ、その憤りは敵たちに向けられる。」

回復したエルサレムを、母親が乳飲み子を抱いて、乳を与えているように描いています。思い出すのは、神が、アブラハムに対して、「全能の神(エル・シャダイ)」として現れたことです(創世17:1)。その「シャダイ」の元々の意味が、「母親の乳房」であります。乳飲み子が母親に抱かれている姿を、神がご自分の名前としてあげておられるのです。全き十全な方です。全き信頼を置き、完全に頼り切っている姿です。本来の神への信頼、神により頼むことがここで回復されています。

そして、このエルサレムを愛して、このエルサレムのために泣いてきた者、彼らに喜ぶ特権が与えられています。エルサレムを愛するとはどういうことか？それは、神が王となっているその都を愛するということです。私たちが、この世において主がシオンに戻って来られることを待ち焦がれている人は、今の生活において呻きが大きいです。悲しみも増します。人々が偽りの中に行き、滅びに向かっていることを悲しみ、また罪を悲しんでいます。もし、エルサレムを愛していなければ、そんな悲しみを持つ必要はないのです。けれども、必ず報いが来ます。慰めがあります。このような悲しみと持っているからこそ、なお一層のこと喜びの特権にあずかっているのです。

そして、ここに川のようなシャロームが流れるとあります。新改訳は「繁栄」と訳していますが、これは正しいです。シャロームは平和という意味もあれば、繁栄という意味もあります。豊かさから流れてくる平和であります。私たちは神の栄光の豊かさ、愛の豊かさにあずかります。その選びの愛にあずかって、そこから流れてくる愛で人々を愛します。平和も同じです。それは川のようにあり、自分だけでなく、人々に流れていきます。やがて来る御国がこのように豊かなので、その豊かさを信仰によって受け取り、他の人々にも流していくのです。

### 3B 火の中から戻られる主 15-24

66:15 見よ。まことに、主は火の中を進んで来られる。その戦車はつむじ風のような。その怒りを激しく燃やし、火の炎をもって責めたてる。66:16 実に、主は火をもってさばき、その剣ですべての肉なる者をさばく。主に刺し殺される者は多い。66:17 おのが身を聖別し、身をきよめて、園に行き、その中にある一つのものに従って、豚の肉や、忌むべき物や、ねずみを食らう者たちはみな、

絶ち滅ぼされる。…主の御告げ。…

ものすごく大きな対比ですね。主のしもべに対する慰めがあり、そして反逆する者たちには裁きがあります。主が火をもって戻って来られます。戦車とありますが、エリヤが天に昇る時も火による戦車がありました。これは戦う天使が付いてきている姿でしょう。そして、「その剣ですべての肉なる者をさばく」とあるとおり、裁きに差別はありません。必ずすべての者が裁かれ、免れることはできません。先ほど、イスラエルの民の中で汚れた偶像礼拝をしている者たちがいましたが、彼らも同じように裁かれます。

66:18 「わたしは、彼らのわざと、思い計りとを知っている。わたしは、すべての国々と種族とを集めに来る。彼らは来て、わたしの栄光を見る。66:19 わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちののがれた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、プル、ルデ、メシエク、ロシュ、トバル、ヤワン、遠い島々に。これらはわたしのうわさを聞いたこともなく、わたしの栄光を見たこともない。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせよう。

ここに、主がお考えになっている大きな宣教の計画が書かれています。まず、18 節の始めに「彼らのわざと、思い計りとを知っている」とありますが、これはユダヤ人全般のことです。悪を行なっているユダヤ人もいますが、そうではない残りの民もいるのです。その残りの民、逃れた者たちに対して、主は印を置いてくださいます。そしてその彼らが、聖書の神について何も聞いたことのない人々に宣べ伝えるのです。ここに、創世記 10 章に出てくる、ノアの家族から分かれ出た民族や地域が書かれています。タルシシュは今のスペインのところ。プルとルデは北アフリカです。メシエクは今のトルコ、トバルはトルコ北部、ヤワンはギリシヤです。地中海沿岸全域またロシアのほうにまで広がっています。

このように、イスラエルの神のしもべが異邦人たちに伝えるという預言は、黙示録7章にあります。大患難が地上に襲いかかる前に、十四万四千人のイスラエル十二部族に神の印が押されます。そしてその後、世界の諸国の大勢の人が、天国においてイエス様に賛美をささげています。このことを指していると思われます。またこれは、教会の始まりでも同じパターンがありました。たった百二十人のユダヤ人の中から教会が生まれました。そしてエルサレムとユダヤ、サマリヤ、そして地の果てまで、ユダヤ人の宣教者らによって異邦人に福音が伝わりました。

66:20 彼らは、すべての国々から、あなたがたの同胞をみな、主への贈り物として、馬、車、かご、騾馬、らくだに乗せて、わたしの聖なる山、エルサレムに連れて来る。」と主は仰せられる。「それはちょうど、イスラエル人がささげ物をきよい器に入れて主の宮に携えて来るのと同じである。  
66:21 わたしは彼らの中からある者を選んで祭司とし、レビ人とする。」と主は仰せられる。

主が再臨される時に、これまで見てきたとおり、離散しているユダヤ人をその国々が全面的に後

押しして、その帰還を助けます。それは彼ら自身にとっての、主への礼拝でもあります。これを先んじて行なっているのが、キリスト者によるユダヤ人帰還支援活動です。BFP等が、日本では最も有名です。

そして帰還したユダヤ人たちの中から、主は祭司やレビ人として選ばれます。地上における神の御国、千年王国においては、祭司のいけにえがあります。しかし、それは、罪の贖いをするためのものではありません。イエス様が既に罪の贖いを十字架で成し遂げてくださったからです。それではなく、記念して行なうものです。今、私たちがパンを裂いて、ぶどう酒を飲むことによってキリストの死を覚えるように、動物のいけにえによってキリストの死を覚えます。罪を贖うためのいけにえではなく、罪が贖われたことを記憶するためのものです。

66:22 「わたしの造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くように、…主の御告げ。…あなたがたの子孫と、あなたがたの名もいつまでも続く。66:23 毎月の新月の祭りに、毎週の安息日に、すべての人が、わたしの前に礼拝に来る。」と主は仰せられる。

先ほどと同じように、22 節は新天新地についての幻、23 節は地上の千年王国についての幻です。預言者イザヤには、使徒ヨハネのようにまで明確な区別が与えられていませんでした。初めに新天新地の幻があり、その途中経過として、安息日や新月の祭りもある千年王国の幻が与えられています。しかし、ヨハネはイエス様が地上に再臨された後に、千年間の地上での統治があり、その後で万物が崩れ去って、最後の審判の後の新天新地があります。

そして強調されているのは、「すべての人が」であります。ユダヤ人だけでなく、世界の国々がイスラエルの神をあがめるということです。イザヤ書の幻を読めば、福音書と使徒の働きの展開が分かります。ユダヤ人のために主が来られましたが、彼らから今度は全ての人々に、イスラエルのメシヤは全ての人の救い主であることが知らされました。ですから、私たちはその延長にいます。私たちがまた、キリストにあってイスラエルの神につながり、全ての人に神へ立ち帰るための使命を持っているのです。

66:24 「彼らは出て行って、わたしにそむいた者たちのしかばねを見る。そのうじは死なず、その火も消えず、それはすべての人に、忌みきらわれる。」

神は、ご自分の最終的な天の住まいをお見せするに当たって、そこに入ることができる人と、そうではない人をはっきりと分けられました。これは黙示録でも同じです。新しい天と新しい地の姿の後に、聖なる者はますます聖められ、汚れた者はますます汚れよ、という言葉があります(黙示 22:11 参照)。都に入れるものは幸いだが、魔術を行なう者、不品行の者、人殺し、偶像を拝む者、偽る者は外に出される、とも書いてあります(黙示 22:15 参照)。主は、すべての人が救われるのだという啓示を与えられません。どちらかの道を選びなさい、という啓示を与えられているのです。